

2-12 ダム試験湛水中に地山変状が発生、突貫工事の責任者は誰が

1. 立場と仕事

建設会社に入社してから25年ほどが過ぎ、この間にダムをはじめ高速道路、鉄道等様々な現場経験を積んでいた。これは、ダム建設工事の現場でJV事務所の副所長、3社JVの構成会社（サブ）における責任者（現場代理人）の任にあったときの出来事である。

2. 遭遇した事態

ダム本体（堤体）工事を終え湛水試験を実施中、1km上流部の貯水池内法面にクラックが発見された。クラックが発生した法面の上方には国道が位置しており、事前調査段階において湛水時の法面安定が問題視されていたため、試験実施前に他の建設会社による法面補強工事（グラウンドアンカーによる補強）が実施されていた。

発注者および道路管理者は、法面のクラック状況を確認し、湛水試験の一時中断を決定するとともに、ダム本体工事の施工者に対し緊急対策工事（特命工事）を要請した。

ところが、緊急対策工事は国道の車両を通しながらの施工であり、十分な監視体制等、安全確保が必須条件となる。国道を通行規制しながらの施工であり、施工スペースが狭く大型重機械が使用できない。また、1日でも早く補強工を実施し、湛水試験を再開しなければならず時間制約も厳しい。一方、作業員の確保も大きな課題だった。正月休み前でアンカー工、足場工等の協力業者が集まらない。

このように非常に厳しい条件の下で迅速な対応が求められた。しかし、JVの中で誰も率先して引き受けようとしなない。さあ、どうする。

3. 対応内容とその結果

自らが率先して突貫工事の責任者となった。JVのサブどうこうに関係なく、自分が引き受けるしかないと考えた。これは、これまでの経験の裏打ちと、責任感からだった。

そして、突貫工事の監理技術者として、発注者、道路管理者、会社の技術部門のサポートを受けつつ、これまでの自らの経験を基に、技術の総力を結集し対策工（一次対策工、二次対策工）を立案し、実施した。その際、工期短縮と安全確保を徹底した。ただし、必要などころには十分に手をかけ、先を見越した計画を立案し、実施した。

まず、作業員を増員し、アンカー工（一次対策）は昼夜兼行の24時間体制で行い、地山の挙動観測結果をリアルタイムで現場に周知し、避難体制を準備した。大雨時は貯水池内で道路が冠水し通行できなくなるため、材料搬入が早期に再開できるように仮栈橋を設置し工程を短縮した。足場工は工区分けし知り合いの業者に協力してもらい増員し、アンカー工作業者は全国から手配した。押え盛土工（二次対策）については、協力業者の仕事量確保のため、材料供給先を調整した。

結果として、一次対策工、二次対策工ともにこれまでの人脈と信頼のおかげで、無事故・無災害で工期短縮することができ、湛水試験を再開することとなった。関係者全員が一丸となつての取り組みだった。発注者および道路管理者の期待に応えることができ更なる信頼を得ることができた。昼夜